

【アフガン侵攻からイラク侵攻への必然性？】

対イラク戦争が秒読みとなった 2003年3月初旬、某大手通信のワシントン局長さんと面談した時、こう言われた。「米国が準備しているイラク侵攻について、さんざん取材した。それでも、なぜ米国がイラクと戦争を今しなくてはならないのか、本当に判った気持になれない。」私も当時「判った気持」になれなかった。

9・11テロを契機に米国にとってアルカイダ組織の破壊が緊急の必要になり、アルカイダの拠点となっていたアフガニスタン・タリバン政権を打倒するためにアフガンに侵攻した。ここまでは大変に良く判る。しかし、次のステップとして、なぜ米国はイラク侵攻に至ったのか？ 昨年の大統領選挙のTVデバートで民主党ケリー候補は、対テロ戦争の目的でイラクに侵攻したことは、日本の真珠湾奇襲攻撃に対応してメキシコに侵攻するようなものだという某論者の引用を行って、ブッシュ大統領を批判した。なぜイラクへの侵攻だったのか？

ブッシュ政権は、①アルカイダとフセイン政権の連携、②フセイン政権による大量破壊兵器の保有、を理由に挙げた。すなわち、フセイン政権が大量破壊兵器を放棄しないならば、それを使用したアルカイダによる次の対米テロが起こる。そのような最悪の事態を阻止するためにイラク侵攻が必要だと説いた。しかしご存知の通り、①は根拠がないことが早くから判ったので、その後は強調されなくなった。②の大量破壊兵器の保有は、戦争に至るまで最大の理由として強調された。しかし、保有されていなかったことが戦争後に判明した。仮にフセイン政権が大量破壊兵器を保有していたとしても、それはイラクのみではない。北朝鮮やイラクも同じであるし、かつてはタリバン支援国家だったパキスタンも公然と核兵器を保有している。にもかかわらず、なぜイラクが対象になったのか？

【表明された動機は真実の一部、あるいは虚構にすぎない】

ある行動を選択した人間の動機を理解するために、私たちはどう考えるであろうか。対象となる人が表明した動機説明だけが全てだと思う人はいないだろう。多くの場合、表明された説明とは別に意識はされているが口にはされない動機がある。利害関係が対立する状況では特にそうである。更に、意識の基底(無意識)に潜む背景的な情念や記憶によって意識は縛られている。国家の政策意思についても同じアナロジーが適用できると考えるのは、的外れではなからう。対外的な説明・理由付け(正当化)と政権の内輪のみで語られる戦略的意図の乖離は普通のことだ。そして政策議論は、主張者らがそれをどれほど自覚しているかどうかにかかわらず、現実世界の利害的諸関係の構造に縛られ、あるいはそれを反映している。

【対極する議論】

イラク戦争に関して対極する議論は次のようにまとめることができるだろう。ひとつは、ネオコンないしはその共鳴者らの意見である。米国は自由と民主主義という普遍的な道義を掲げて、世界に対峙し、介入して行くべきだと主張する彼らは、没価値的なバランス・オブ・パワーのアプローチを退ける。また、国際協調や国連については、それを軽視、あるいは冷笑し、米国による力の政策を信奉している。良く知られていることだが、ウォルフォビッツ氏は91年の湾岸戦争の時も、米国はクエートからイラク軍を撤退させるだけでなく、イラクにそのまま侵攻し、フセイン政権を打倒することを主張したそうだと。彼にとってフセイン政権は「中東のナチス政権」であった。彼らの視点に立てば、対イラク侵攻とフセイン政権の打倒は、米国のイニシアチブによる「中東民主化プログラム」の戦略

的に重要な第一歩である。今年の1月のブッシュ大統領就任式典での演説では、「世界から圧制国家を終焉させる自由と民主主義の闘い」という大義が強調されたが、それを字句通りに受け入れることのできる人は、こうした考え方をしていることになる。人間には、自分が演じている役柄に同化し易いタイプがいる。こういうタイプは、セリフを繰り返している内に、セリフと本来の動機の区別がつかなくなる。もしかしたら、ブッシュ大統領はそうしたタイプかもしれない。

ネオコンの対極には反米・嫌米の見解がある。米国は口では自由と民主主義を掲げながら、自国の利益、権益を最優先にしており、自国に手向かう政権は武力で転覆することも厭わないのだと彼らは批判する。では対イラク侵攻の動機となった「米国の利益」とは何か？最も通俗的には「米国の目的はイラクの石油資源の支配」であるなどと主張される。

イラク戦争の目的がイラクの石油資源だという俗説は、ちょっと考えればおかしいことが判る。世界がブロック化した20世紀の前半の古典的な帝国主義の時代ならともかく、現代では米国を含む石油消費国は市場価格で原油が供給されていれば、それでOKである。武力を用いて他国の石油資源を略奪的に確保することの方が、遥かに大きなコストになり、どうい割に合わないことを知っている。石油輸出諸国も皆経済的に石油収入に深く依存しているので、供給を大幅に絞ったり、禁輸して政治の道具にするような70年代の石油危機を引き起こした時のようなことは、今日では出来ない。

【2002年に起こった米国の中東戦略転換】

2002年ワシントン赴任が決まってから、私はフォーリン・アフェアーズ・ジャパン編の「アメリカはなぜイラク攻撃を急ぐのか」(朝日文庫)などを慌てて読んで勉強した。サボり続けていた岡崎久彦さんの勉強会にも顔を出し、ご高説をうかがった。その結果、2002年になって米国で次のような戦略的な意見が台頭したことを知った。「イラクのフセイン政権を打倒して、民主的な親米政権を樹立できれば、中東地域での米国の影響力は格段に増す。その結果、対テロ戦争も、パレスチナ・イスラエル紛争解決も、米国のイニシアチブで効果的に展開できるようになるだろう。」

しかし、2002年にどうしてそのような戦略転換が起こったのかが、判らないでいた。80年代には米国はイラクとイランに対して典型的な勢力均衡政策を採り、イラクのフセイン政権を支援しながら、その一方で極秘裏にイランにもミサイルを提供した(イラン・コントラ事件)。そうした政策から、イラク侵攻・フセイン政権打倒への転換はどうして生じたのか？9・11テロの結果、米国が対テロ戦争のために「先制攻撃主義」を主張する攻撃的なネオコン政策に傾斜した結果としてこれは一般には理解されている。しかし、大量破壊兵器あるいはその開発計画を有している危険があると思われた国はイラクだけではなかった。

この点について、「嗚呼、フリーダム」で紹介した米国の在野の軍事・安全保障問題の専門家 George Friedman がその著書“American Secret War”の後半部分で、明瞭な説明を提供している。以下に紹介しよう。

* * * * *

【緊急至上命題となったアルカイダの第2次攻撃の阻止】

9・11テロの後、米国とブッシュ政権にとっての差し迫った脅威は、アルカイダによる米国に対する第2次テロ攻撃だった。それに核兵器を含む大量破壊兵器が使用されるような最悪の事態はなんとしても阻止しなくてはならなかった。

アルカイダ壊滅と首領ビンラディンの抹殺ないしは捕縛を目的に行われた2001年10月アフガン侵攻は、タリバン政権を崩壊させた点では成功だったが、ビンラディンを抹殺・捕獲できなかった点で大きな痛手を残した。また、集中した拠点を持たず、人的ネットワークとして存在するアルカイ

ダ組織を壊滅させることは困難で、しかもサウジアラビアに人的、資金的なアルカイダの供給源があることが判ってきた。

【米国にとって真の問題は協力を渋るサウジアラビアだった】

しかしサウジ政府はアルカイダ摘発について米国への協力を渋った。その理由の第1は、サウジの有力層にはアルカイダへの深い共感があり、サウジ政府にとってアルカイダの取り締まり強化は「身内」を叩くようなものだった。それは国内の政治的な緊張とリスクを高めるだけで、サウジ政府にとって割に合わなかったからだ。サウジ政府は、パレスチナ・イスラエル問題などを持ち出し、この問題でのイスラエルとそれを支援する米国のパレスチナへの譲歩がなければ、中東での反米テロも抑えることができないというような抗弁をしきりに持ち出した。しかし現実的に可能な譲歩でこの問題が解決・和解に向かうほど簡単ではないことをサウジ政府は十分承知しており、これは米国の圧力を交わすための口実に過ぎなかった。

サウジ政府がアルカイダ摘発に非協力だった理由の第2は、91年の湾岸戦争や2001年の米国のアフガン侵攻の結果にもかかわらず、サウジを初めとするアラブ諸国の米国の「強さ」に対する評価が低かったことだ。つまり米国は、ハイテク兵器は超高度に発達しているが、自国兵員の大規模な損耗に至るような軍事行動リスクを採ることの出来ない国、従ってある規模以上の国を相手に駐留・鎮圧支配することができない「不完全な軍事大国」とアラブ諸国から見られていた。この認識が米国への彼らの「あなどり」を生んだ。

一方、アフガン侵攻の結果、アルカイダの早期殲滅の可能性を失ったブッシュ政権としては、長期的なスタンスに戦略を変更するしかなかった。しかもアルカイダ掃討のためには、その人的・資金的源泉となっているサウジをはじめアラブ主要国政府の協力が必要だった。ところが、彼らは協力を渋り、米国をあなどっていた。

【米国をあなどるアラブ諸国政府に「ガツンと一発」】

サウジ政府は米国政府のスタンスを読み間違えたのである。アルカイダによる米国への第2次テロを阻止するためには、ブッシュ政権はどのようなことでもする気でいた。一方、イランは宿敵の隣国イラク・フセイン政権が倒されること望んでおり、米国のイラク侵攻を支持し、そのためならアルカイダ組織の破壊にも協力する姿勢を見せた。こうした環境変化の結果、米国にとって戦略的に必要なことは、サウジを初めアラブ諸国に有無を言わずにアルカイダ掃討に協力させる強い軍事的・政治的影響力を中東で打ち立てることとなった。その手段として、イラク侵攻、フセイン政権打倒と親米政権の樹立が選ばれたのである。

なぜターゲットがイラクになったか？ それは、①イラクは周囲6カ国と国境を接する中東地理上戦略的に重要な位置にある、②フセインは周辺諸国に対しても脅威であり、クルド人に対して化学兵器の使用実績もあり、世界的にも文句なしの完全な悪役である、③イラクはサウジに次ぐ原油の埋蔵量を有しており、イラクが「正常化」して、その原油の国際市場への供給が増えれば、原油の供給が量、価格ともに安定化するのに役立つ(米国といえども、それを略奪することはできない。)

予てからフセイン政権の打倒を唱えていた政権内部のネオコン論者は、それまでは支持を得られなかった。しかし、こうした国際環境を反映した米国政府の戦略転換の結果、イラク侵攻に関して副大統領のディック・チェイニーを含め政権内部の支持が広がったと理解できる。

この戦略転換の上で、対イラク侵攻を正当化する「フセイン政権とアルカイダの連携」「フセイン政権による大量破壊兵器の開発、保有」が大義名分として選定されたのである。ブッシュ政権は、なぜ本当の戦略的意図を語らないのか？ 「米国をあなどって、アルカイダ掃討に協力しない連中

の目を覚ますためにガツンと一発必要だ」という動機説明は、どう考えても内外ともに受けが悪い。統治者は、いつの時代でも、戦争の遂行方法と同時に、戦争の大義名分の取得に工夫をこらした。民主主義政治の下では、尚更大義名分が大切である。

最初に掲げた大義名分が実証不能、あるいは否定された時点で、大義は「世界の圧制国家の終焉、自由と民主主義の拡大」に塗り替えられた。ネオコン論者らは多くの血を流しても「普遍的な道義を掲げた積極介入政策」と「先制攻撃主義」を米国の対外政策として主張する。しかし、1月のブッシュ大統領の就任演説の後のアンケートにも表れた通り、多くの米国民は「自由と民主主義」を普遍的正義と思っているが、それを目的に大きな犠牲を払って米国が単独で世界に介入することには消極的・懐疑的である。政権内部の非ネオコンの多くも合理的に米国の利益を考えていることだろう。従来のように、中東に強い軍事的・政治的プレゼンスを持たずに、勢力均衡的なアプローチを用い、最小限のコストで米国の安全保障と原油の市場供給が確保できるならば、当然それを選択したのだ。そうした環境を一変させてしまったのが、アルカイダによる9・11テロとサウジなどアラブ諸国による米国非協力姿勢だったのである。またこの変化は不可逆なものでもない。勢力均衡政策など別のアプローチを用い、より少ないコストで米国の安全保障が実現できる環境変化が起これば(例えばアルカイダの壊滅)、いつでも再び転換されるであろう。その時、ネオコン論者は政権内部で廃業するだけだ。

【歴史は繰り返す】

さてこの戦争の結果は、アルカイダと米国双方に何をもたらしたか？ アルカイダの対米テロの目的は、まず対米テロにより米国の中東への軍事的な侵攻を招き入れることにあった。そして反米闘争が起こり、同時に米国と戦おうとしない現サウジ政府を含む「腐った世俗政権」の打倒を目指すイスラム原理主義の運動がイスラム諸国に燎原の火となって広げることだった。かつてレーニンが植民地の反帝国主義闘争を共産主義革命に転化させようとしたのと同じような戦略だ。この点でアルカイダの対米テロは極めて特殊な政治テロである。彼らは目的の第1段階(米国による軍事侵攻の誘引)には成功したが、現アラブ諸国政権を転覆させるイスラム原理主義の運動は起こっておらず、この点では失敗している。

米国の目的は果たされただろうか？ フセイン政権を倒してイラクに親米的民主主義政権を樹立し、サウジを含むアラブの周辺諸国にアルカイダ掃討に協力させる戦略は、一定の成果を上げつつあるようである。ただしイラク戦争の経済的・人的コストが当初の見込みを大幅に上回っている。問題は今後の帰趨であり、それはイラク新政権の安定化とイラク国内のテロ鎮圧の成否にかかっている。それに失敗すれば、アラブ諸国は再び米国政府に背を向けるであろう。

米軍がイラクから容易に撤退できないのは、こう考えると当然である。また新イラク政権が正統性を得て、安定化しても、反米的政権になっては元も子もない。米国は「金で買ってでも」親米スタンスを実現させるであろう。米国からの経済援助に依存した政権、対米依存で私腹を肥やす政治家・高官、経済的恩恵から排除された民衆とその不満の高進、こうして歴史はまた繰り返すのであろうか。

以上